九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

NP移動の廃止について

鈴木, 右文
九州大学大学院言語文化研究院 : 言語科学部門・言語情報学

https://doi.org/10.15017/7151991

出版情報：言語科学. 36, pp.73-82, 2001-02-28. 九州大学大学院言語文化研究院言語研究会
バージョン：
権利関係：

NP 移動の廃止について[注1]
(On the Non-existence of NP-movement)

鈴 木 右 文

1　本稿の目的

鈴木 (1999a) は、繰り上げ構文 (Raising Constructions) や受動文をA移動 (A-movement) に依存せずに説明する分析として、主題役割繰り上げ (θ-raising) という仕組みを提案した。本稿の目的は、ミニマリスト・プログラム (Minimalist Program) の枠組みでは用いることができない主題役割繰り上げを、同プログラムの枠組みで捉え直す方法を提示することにある。あわせて、ミニマリスト・プログラムではこれらの構文を NP 移動 (NP-movement) に依存しないで説明することが自然であることを示す。

２節では、ミニマリスト・プログラムに至るまでの生成文法での「移動 (movement)」の取り扱い方法の歴史を簡単に振り返り、その流れを確認する。３節では、その流れに沿って同プログラムを進めていくと、NP 移動に依存しない文の派生が自然と考えられることを主張する。４節では、鈴木 (1999a) を概観し、５節では、それをミニマリスト・プログラムのもとでどのように捉え直したらよいかを示す。

2　移動の扱いの変遷

移動変形 (movement transformations) は生成文法の最も生成文法らしい特徴のひとつである。そもそも生成文法では、Chomsky (1965) によって提示された標準理論 (Standard Theory) の時代をはじめ、表面的に観察できる表層構造 (Surface Structure)の背後には深層構造 (Deep Structure) があるものと考えられており、両者を関係づける移動変形は、生成文法理論の根幹を成す装置のひとつであった。以降、生成文法理論の発展の中で、移動の捉え方は一般化・簡素化の一途をたどることになる。

時代が下り、Chomsky (1972) に始まる拡大標準理論 (Extended Standard Theory) の時代には、変形規則の適用に課される下接の条件 (Subjacency Condition)、指定主語の条件 (Specified Subject Condition)、時制文の条件 (Tensed S Condition) などの一般的制約が提唱されるようになった。これは、普遍的メカニズムの追究、文法の簡素化という生成文法理論発展の歴史的潮流からすると自然な展開であった。構文ごとに変形規則を設け、その規則ごとに特殊な適用の条件を盛り込んでいた時代から見れば大きな動きであった。

時代がさらに下って、Chomsky (1977) の痕跡理論 (Trace Theory) が組み込まれた改訂拡大標準理論 (Revised Extended Standard Theory) の時代には、移動変形は痕跡を残すものと考えられる

[注1] 本稿をまとめる上で、福岡言語学会や福岡統語論研究会での度重なる議論が大変役に立った。お名前を列挙することはしないが、議論に参加してくださった方々に紙面を借りて御礼申し上げたい。

ようになり、束縛原理 (Binding Principles) の適用レベルを表層構造に限定できるといった形で文法の簡素化がはかられた。

一方移動変形そのものについては、生成文法理論の初期には現象の種類ごとに、受動変形 (Passive Transformation)、繰り上げ変形 (Raising Transformation)、疑問文形成 (wh Fronting)、話題化変形 (Topicalization) など数々の変形が設定されたが、Chomsky (1977) で Move NP と Move wh に収斂した。Move NP は受動変形と繰り上げ変形を一般化したものであり、Move wh も疑問文形成や話題化などを統合したものだった。Chomsky (1980) ではさらにこれら２つの移動操作が Move α １つに束ねられた。以降 Chomsky (1981) に始まる統率と束縛の理論（ＧＢ理論）(Government and Binding Theory) の時代にもこの考え方が継承された。[注2]

移動の取り扱いの歴史の中で、論理形式 (LF, Logical Form) の登場も大きな出来事だった。文の表示レベルとして深層構造と表層構造の他に、1970年代後半から論理形式の設定が提唱されるようになってきた。Chomsky & Lasnik (1977) では、変形部門 (Transformational Component) の出力であるＳ構造 (S-Structure) が、論理形式部門 (LF Component) を経て LF に至り、同時に音声形式部門 (Phonological Component) を経て音声形式 PF (Phonetic Form) に至る (1) のような文法のモデルが示されている。

(1)　D-Structure →（変形部門）→ S-Structure →（論理形式部門）→ LF
　　└──→（音声形式部門）→ PF

論理形式部門では様々な解釈規則が適用されるものと考えられているが、数量詞 (quantifier) の解釈やＷＨ句の領域 (scope) の決定などの統語構造に依存した意味解釈においては、統語的移動 (syntactic movement) も適用されるものと考えられた（数量詞に関しては May (1977) を参照）。この移動操作 (movement operation) は、PF への枝分かれ (Spell-Out) の後で生じるため、表面的に観察される音形や語順には影響を与えないので、不可視移動 (covert movement) と呼ばれる。不可視移動は、移動がＤ構造 (D-Structure) とＳ構造を関係づけるだけではなく、Ｓ構造と LF をも結びつけるものであり、移動の表示同士を関係づける操作としての一般性が高まる結果になった。

（可視）移動に対する一般的制約は、Chomsky (1986) において、障壁 (barriers) のメカニズムのもとでさらに一般化された。移動操作も Move α １つに収斂していたので、それに対する制約が一般化されたのは自然なことである。

ところで、統率・束縛理論は、文法理論の中の２つの下位理論のみを用いた呼称なので、原理と媒介変数のアプローチ (Principles and Parameters Approach) と呼ぶ方がふさわしいと考えられるようになった。核文法 (Core Grammar) の中で媒介変数が言語間の差異を説明するが、これは英語以外の言語も含めて言語一般を説明する具体策である。

その後 Chomsky (1993, 1995, 1999) で展開されているミニマリスト・プログラム (Minimalist

[注2] Lasnik & Saito (1984) では、削除と挿入も含めてすべての変形操作を Affect α １つにまとめることさえ提案された。

Program) は、原理と媒介変数のアプローチの一種であるが、文法の簡素化を推し進め、それまでのＧＢ理論で用いられてきたＤ構造、Ｓ構造といった表示のレベルさえも廃止した。移動理論にかかわる先行詞統率 (antecedent-government) を始めとした多くの概念が存在根拠のないものとして排除され、そのかわりに素性 (feature) による駆動、最少連結条件 (Minimal Link Condition)、経済性の原理 (the Principle of Economy) などの「自然」なメカニズムが導入された。文法から正しい出力が得られるかどうかということだけではなく、そのメカニズムが人間の生物的特性に照らし合わせて自然であるかどうかということも評価の対象になったわけで、移動理論がより広い見地から見た一般的妥当性を帯びるようになったと言える。

ミニマリスト・プログラムで最も大きく変更された点は、与えられた語彙を用いてＤ構造をいきなり導き出すのではなく、語彙を１つ１つ併合 (Merge) する形で派生が進み、構造全体が出来上がったときには派生が収束 (converge) している点である。従来の枠組みであれば、例えば *I wonder what she can give to me* の補文は、*she can give what to me* のようなＤ構造がいきなり生じ、それに移動変形が適用されることで派生されるものであったのに対し、ミニマリスト・プログラムでは、*to* と *me* の併合で PP を作るところから始まり、補文文頭に *what* が移動して [$_{CP}$ C [$_{IP}$ she can give t to me]] と併合し、補文 [$_{CP}$ what [$_{C'}$ C [$_{IP}$ she can give t to me]]] が完成する。このような派生では、移動は統語的構成物 (syntactic object) である文を構築する過程で必要になる操作で、その一部に併合を含むものと捉えることができる。このように考えると、文を派生する元になる語彙の集合である numeration の中から単語を取り出して併合する場合は純粋な併合 (pure merge) であり、移動によって併合が生じる場合もあわせて、派生は併合の繰り返しと捉えられる。このように考えると、移動がそれ以外の操作と大部分共通のものであるとの一般化が達成されたものとも言える。

3　よりミニマリスト的な派生

２節で見たように、生成文法の歴史は、変形規則やその制約の一般化・簡素化が大きな特徴であったと言える。3.1 でミニマリスト・プログラムの先延ばしの原理 (Procrastinate)（不可視移動で済むのであれば可視移動は避ける）を取り上げ、3.2 では一般化の歴史に沿ってこの考え方を発展させると NP 移動に依存しない派生に至ることを主張する。

3.1　不可視移動

先延ばしの原理の働きの概略を、ミニマリスト・プログラムの最大の特徴である素性による駆動とあわせて見ておく。*I wonder what she can give to whom* の補文の派生は *to* と *whom* の併合から始まり、やがて C と IP が併合される。C には [+wh] という意味解釈に関係しない形式素性 (formal feature) があり、[注3] こうした解釈不可能な素性 (uninterpretable feature) は削除されな

[注3] これに対しWH句の持つ [+wh] は疑問詞の意味解釈をもたらす意味素性である。[+wh] を持たないWH句は例えば関係節で用いられる。

いと LF での完全解釈の原理 (the Principle of Full Interpretation) に違反して派生が非合法となってしまうので、[+wh] を持つ *what* に移動して [$_{CP}$ C [$_{IP}$ she can give t to whom]] と併合してもらい、指定部主要部の一致 (Spec-Head Agreement) のもとで [+wh] をチェック・削除してもらわなくてはならない。しかもこの移動・削除はWH句の [+wh] 素性だけではなく、WH句そのものによって行われなければならない (pied-piping)。英語の C が持つ [+wh] は強い素性 (strong feature) であり、強い素性は PF への出力に残留すると音形上解釈不能で、PF での完全解釈の原理に違反するので、この強い C の [+wh] 素性は、Spell-Out までにチェック・削除されなくてはならず、Spell-Out 前の移動は素性単独では不可能なものとされているので、*what* が句全体として piied-pipe しなければ非合法な派生となってしまう。[注4]

一方WH句は、疑問詞としての正しい解釈を受けるために節頭の CP 指定部に移動しなくてはならないが、(2a) では *what* は移動しているものの *whom* は移動していないし、[注5] また (2b) が示すように移動してはならない。

(2) a. I wonder what she can give to whom

b. *I wonder what whom she can give to

これは、*what* は C の強い [+wh] 素性を削除するために pied-pipe されて移動しなければならないのに対し、*whom* にはそのような任務はなく、先延ばしの原理によって、節頭への移動は音形を伴わない素性だけの不可視移動としなければならないからである。

以上のように可視移動よりも不可視移動が選ばれる先延ばしの原理は、可視移動の方が操作としてのコストが高いものと考えれば経済性の原理に由来するものと考えることができる。これも統語現象を捉えるメカニズムの一般化のひとつであり、2節で見てきた一般化の流れに沿うものである。このように不可視移動を優先した派生の考え方を押し進めていくと、NP 移動に依存せず、NP のかわりに関係した素性が不可視移動する分析が好ましいというのが本稿の主張である。3.2 節以降でその主張を見る。

3.2 NP 移動なしの派生

(3) のような繰り上げ構文では、従来より NP 移動が関係するものとされてきた。

(3) Johni seems [ti to believe the claim]

これは、*John* が主題役割付与 (θ-role assignment) 上補文に属し、格を得る都合からすると主文に属するという乖離を解決するためである。ところが、生成文法理論の一般化・簡素化の歴史の流れに沿って不可視移動の優先ということをさらに考えてみると、もし繰り上げ構文で NP の移動によらず、不可視移動によってこの乖離を捉えることができるのであれば、そういう派生は許されるべきであると思われる。この場合、(3) の *John* は主文主語の位置に基底生成（純粋な併合）されると考えることになるのだが、鈴木 (1999a) では主題役割繰り上げという操作

[注4] 最新の展開の中で、強い素性と弱い素性という区別は「自然」な区別でないから、強弱なしの素性しか許されないという議論もある。本稿ではそこまで踏み込まない。

[注5] このときに *whom* ではなく *what* が移動する理由については 5.2 を参照のこと。

によって NP 移動の欠如を補うことを提唱した。しかしこのメカニズムは統率 (government) などミニマリスト・プログラムでは廃棄されている概念を用いているため、本論では主題役割付与を主題役割素性 (θ-feature) のチェック（同素性の不可視移動）に基づくものと考えて問題の乖離を捉える方法を探る。

4　鈴木 (1999a) の主題役割繰り上げ

従来の分析では、繰り上げ構文においては NP が主語位置へ移動するものとされてきた。それに対し鈴木 (1999a) では、NP ではなく主題役割の方が繰り上げられて付与され、NP は「移動先」の位置に基底生成されうるという分析を提示した。例えば *John seems to believe the claim* では主語の *John* が主文主語の位置に基底生成され、*believe* が持つ Experiencer が補文 V から次々と繰り上げられて、主文 VP から統率のもとで *John* に付与される。

そもそも外項の主題役割 (external θ-role) は VP 内で V から付与されることはなく、VP 内主語仮説 (VP-internal Subject Hypothesis) が提唱される以前の枠組みでは、[注6] 詳細は研究者によって差異があるものの、おおむね、外項の主題役割は何らかのメカニズムによって VP に繰り上げられ、VP から統率のもとで主語位置にある NP に付与されるものと考えられていたとまとめてもよいだろう。このようにそもそも主題役割の繰り上げは従来からの理論にも部分的に組み込まれていたと見なすこともできる。この繰り上げを節境界を越えて適用すれば上位の節にも主題役割を繰り上げることができるので、その主題役割を付与される ＮＰ ははじめから「移動後」の位置に基底生成されていても構わないことになる。この分析は、受動文、非対格構文 (unaccusative construction) にも適用され、通常の節の主語も VP 指定部ではなく IP 指定部に基底生成されてよいことになる。

但し、従来の繰り上げは外項の主題役割に限られていたのに対し、鈴木 (1999a) の枠組みでは付与先のない主題役割は外項のものに限らず繰り上がることができることになる。*John was killed* のような受動文では、*John* は外項ではないけれども、主語位置に基底生成され、*killed* の持つ内項の主題役割は VP 内に付与先の NP がないので繰り上がって *John* に付与される。

また、「付与先の NP がないときに繰り上がる」のであれば、中間の主語位置は空であるはずで、John seems [to believe the claim] では、補文の主語の位置には何もないことになる。これは拡大投射の原理 (Extended Projection Principle) の主語の必要性に関する要請と矛盾するので、同原理の当該部分は廃棄しなくてはならない。他のいかなる原理からも説明されず、拡大投射の原理のこの部分によってしか説明されない主語がらみの現象があると証明されない限り、この廃棄の方針は維持できる。[注7]

鈴木 (1999a) は NP 移動を廃止するメリットとして、文法の簡素化と、NP 痕跡 (NP-trace) に

[注6] VP 内主語仮説に関しては Fukui (1986)、Kuroda (1988)、Kitagawa (1986)、Koopman & Sportiche (1988)、Sportiche (1988)、Burton & Grimshaw (1992) 等を参照。

[注7] 格付与と主題役割付与の要請の他に拡大投射原理による主語の要請も文法に含めることに関する議論については Ura (1996) を参照。

再構成効果 (reconstruction effect) が見られないことを挙げている。[注8] また、デメリットに一見見える文法現象についての解決方法を検討している。

しかしこの枠組みは、現行のミニマリスト・プログラムでは直接採用することはできない。まず、主題役割付与の前提となる統率は同プログラムで廃棄されている。また同プログラムでは、主題役割繰り上げのような長距離依存関係は他に利用されることのない特別なメカニズムとなり、好ましくない。

5 ミニマリスト・プログラムでの取り扱い

4節で概略が提示された分析をどのように捉え直したらミニマリスト・プログラムで採用することができるであろうか。

5.1 主題役割素性のチェック

まず、同プログラムでの文の派生が併合の繰り返しに依存し、D構造のような純粋な主題関係の表示のレベルは存在しないので、主題役割付与がどのような形で行われるのかが問題になる。多くの文法現象を素性のチェックのための移動で説明しようとするミニマリスト・プログラムの中で、主題役割付与だけが別のメカニズムに依存することになるのは、文法の簡素化などの観点から見て妥当なことだとは思われない。そこで、主題役割付与は主題役割素性のチェックによって、名詞句が併合されるたびに行われるものと考えたい。主題役割付与が素性のチェックによるという考え方は、Manzini & Roussou (2000) などでも提唱されており、突飛な発想ではない。

John seems to believe the claim という例文の派生を考えてみよう。動詞 *believe* は、主題役割素性として内項 Theme と外項 Experiencer を持つと仮定する。動詞が持つ主題役割素性は解釈不可能な素性である。これは、Infl が持つ D 素性が解釈不可能な素性であるのが Infl がDであるのはおかしいからであるのと同様に、動詞が Theme であるというのはおかしく、正しい意味解釈を妨げるからであると考えられる。従って、*believe* が持つ Theme は名詞句が持つ同素性によってチェック・削除されなければならず、*believe* と *the claim* の併合（これに *the* と *claim* の併合が先行する）によって、*believe* の持つ Theme 素性が *the claim* の持つ Theme 素性にチェック・削除される。[注9] この場合、*claim* が辞書 (Lexicon) の中から選択されて numeration に加わ

[注8] NP 痕跡に再構成効果がないことを示す証拠として鈴木 (1999a) が挙げる証拠は外池・大石 (1992: 343) の (i) である。

(i) a. *which claim that John was asleep was he willing to discuss (John = he)
b. the claim that John was asleep seems to him to be unfortunate (John = him)

[注9] ミニマリスト・プログラムでは、基底生成された位置（純粋な併合によって導入された位置）ではチェックができないという考え方があるようだが、ここでは *believe* と *the claim* の純粋な併合によって主題役割素性がチェックされるものと仮定しておく。対格のチェックがどう行われるのかについてもここでは触れない。但し、本論の枠組みでは、NP 移動がないことになるので、チェックのためにA位置へ繰り上がることもなくなり、*believe* と *the claim* の純粋な併合の段階で主題役割も対格もチェックされると考えざるを得なくなる。もしこれで正しいのだとしたら、文の派生がよりシンプルになって、文法の簡素化にもつながるであろうが、同時に考えるべき問題も多く、ここでは示唆に留めざるを得ない。

るとき、主題役割素性の帯び方の可能性は何通りもありうるが、Theme 素性が 1 つのみ付加されているのが正しい。これ以外の素性の帯び方で numeration に加わる場合は、*believe* の持つ解釈不可能な Theme 素性がチェックされないまま LF に至り、完全解釈の原理に違反して、非合法な文が生じる結果となる 。またこの *believe* の素性が *the claim* にチェックされる結果、*the claim* の Theme 素性が Theme (believe) のように標示されるようになると考えれば、LF で正しい解釈がもたらされる。[注10]

次に *to* と *believe the claim* が併合する。その次には *John* ではなく *seems* が併合して、*seems* の持つ命題の主題役割素性が補文 IP の持つそれにチェックされる。*John* は最後になってようやく併合される。この段階でまだ *believe* の Experiencer 素性がチェックされていないので、主文 Infl に移動、[注11] *John* の持つ Experiencer 素性にチェックされる。この場合、*John* の併合の後で *believe* の Experiencer 素性が移動することになり、Extension Condition に違反してしまうように見えるが、*John* の併合位置と Experiencer 素性の移動先は同じ IP の指定部と主要部であるから、同一句に直接支配される位置同士であれば違反が生じないものと考えることによって問題を解決できるように思われる。

こうして派生が完了するわけだが、従来どおりの NP 移動による派生は許されなくなる。単純に考えると、同じ numeration から出発する派生の中で、名詞句が移動するよりも、非明示的要素である素性が移動した方が派生としてのコストが低いのが原因であるように思われるが、事態はそう単純ではない。鈴木 (1999b) の枠組みでは、理由があってWH句自体が移動する派生と動詞の主題役割素性が移動する派生のいずれも認めているのだが、[注12] 「名詞句が移動するよりも、非明示的要素である素性が移動した方が派生としてのコストが低い」のであれば、WH句自体の移動は許されないことになってしまう。そこで、「A位置を増やす移動は認められない」ものと考えておく。これに従えば、NP 移動はA位置への移動であるから、A位置を増やしてしまうので認められないことになるが、WH移動は非A位置への移動であるから、適用可能であることになる。もしかしたらこの制約は表示の経済性に由来するものと考えることができるかもしれない。

5.2 問題点

この分析には克服すべき問題点も多い。その多く（数量詞繰り下げ (quantifier lowering)、動詞的受動態 (verbal passive) と形容詞的受動態 (adjectival passive)、２次述語 (secondary predicate) と結果述語 (resultative predicate) ）は鈴木 (1999a) に譲り、本稿では問題を２つに限る。

[注10] 但し、(believe) のような素性につく素性のようなものが許されるかどうか、また派生の途中でこのような標示を加えることが Inclusiveness Condition に違反しないのかどうかの問題が生じ、解決が必要であるが、本論ではこの問題に立ち入らない。

[注11] チェックされるべき素性を含む主要部の指定部へチェッカーとしての句が移動してくるのが普通であり、チェックされるべき素性の方が移動するのは異例に見えるが、移動が必要な点では同じことである。また、最近提案されている Agree、Match ではどうなるのかという点については立ち入らない。

[注12] 理由の詳細については鈴木 (1999b) を参照していただきたいが、事情により論文化が遅れている。

まず、(4a) のような超繰り上げ (Superraising) を取り上げる（例文は Manzini & Roussou (2001: 430) より。痕跡表記は筆者）。

(4) a. *Johni seems that it was told (ti) that Mary left

b. it seems that Johni was told (ti) that Mary left

NP 移動があれば、(4a) では *John* が *it* を越えて移動することになるので、即座に最少連結条件に違反すると説明できる。最少連結条件を (5) のように捉えておくと、

(5) K attracts α only if there is no β, β closer to K than α, such that K attracts β.

(Chomsky 1995: 311)

主文 Infl の素性が *John* を牽引 (Attract) するときに、より近い名詞句 *it* が存在するので、*John* の移動は最少連結条件に違反する。しかし、*John* の NP 移動がそもそもないのであれば、最少連結条件の違反も生じないので、(4a) が誤って認められてしまうことになる。

しかし、NP 移動が存在しないと考えても、*told* の主題役割素性の移動が最少連結条件に違反するという考え方が可能である。最少連結条件を、Chomsky (1999) が言うところの probe と goal のいずれが移動しようと、潜在的な goal の介在者がある場合に移動が阻止されるものと考えると説明がつく。(4a) では、probe である *told* の主題役割素性が移動するが、goal である *John*（主文主語の位置）との間に名詞句 *it* が介在するので、最少連結条件の違反が生じる。WH移動の例 *howi do you wonder [what to fix ti] では（probe は主文 C の [+wh]）、goal である *how*（の基底生成位置）との間に別のWH句 *what* が介在しているので違反が生じることになる。次のような優位条件 (Superiority Condition) 違反のケースも説明できる。

(6) a. who did you tell t to read what

b. *what did you tell who to read t

(6b) では、probe の主文 C [+wh] に対し、*what*（の基底生成位置）との間に *who* が介在するので、最少連結条件の違反が生じる。

次に、(3) では、*believe* の主題役割素性が、主文主語の位置に *John* が併合されるまでチェックされないままということになる。補文主語の位置に *John* が併合されればもっと派生の早い時点で素性がチェックされるのに、先延ばしされてもよいのだろうか。一般に補文 Infl が VP と併合された後、主語名詞句が併合されるか主文動詞が併合されるかいずれが先でなければならない理由も見あたらず、どちらの派生も可能であると思われる。

5.3 利点

注 8 に挙げられているものの他にも、主題役割素性の移動を考えることによる利点がある。まず、義務的 control での PRO を文法から排除することができる。Manzini & Roussou (2000) の枠組みに従うと、*John wants to go* のような例では、*go* の主題役割素性が主文 Infl に移動すれば *John* へ主題役割を付与できる。この場合、*John* は *wants* の主題役割素性も持つ。このように考えると、１つの名詞句が複数の主題役割を持つことになるが、複数の主題役割素性をまとって

numeration に入ればよいのであるから、何も説明に困らない。

また、Burton & Grimshaw (1992) が指摘する難点を VP 内主語仮説を採用しなくても説明することができる。

(7) John suddenly stopped and appeared to have been lost

(7) では、等位接続された２つの動詞句のうち、第１番目のものは *John* を外項とするので *John* はもともと主語の位置に基底生成され、第２番目のものは *John* を内項とするので *John* は派生主語である。これは矛盾であるが、Burton & Grimshaw (1992) の提案するとおり VP 内主語仮説を採用すると、いずれの動詞句にとっても *John* は派生主語となり、矛盾が解決される。しかし、主題役割素性の移動を採用すると、(7) では *stopped* と *lost* の主題役割がそれぞれ移動して *John* に付与されるので、VP 内主語仮説を採用する必要がなくなる。

6　結論に代えて：　非Ａ移動、主要部移動の扱い

本稿では、ＮＰ 移動が存在しない枠組みをミニマリスト・プログラムではどのように扱うことになるかのあらましを示した。NP 移動に依存しないこの分析は、GPSG (Generalized Phrase Structure Grammar) などの枠組み (cf. Gazder et al (1985)) に似ているが、移動が全く仮定されていないわけではなく、非明示的要素の移動を含んでいる点と廃止対象が NP 移動に限定されている点が異なる。但し、移動に依存しない説明が NP 移動以外にも拡大できるかどうかは検討の余地がある。もっとも、主要部の場合は無理だろう。*what must John buy* で *must* が C に基底生成されるのであれば、VP と [$_N$ John] が併合されることになり、併合後の範疇が NP になっても VP になってもその後の派生がうまくいかない。WH移動については、「移動先」の位置に基底生成の場合と移動が存在する場合とどちらもあるというのが鈴木 (1999b) の立場だが、更なる検討は今後の論考に委ねることとする。

参　考　文　献

Burton, S. & J. Grimshaw (1992) "Coordination and VP-internal Subjects," *Linguistic Inquiry* 23, 305-13.

Chomsky, N. (1965) *Aspects of the Theory of Syntax*, Cambridge, Mass.: MIT Press.

Chomsky, N. (1972) *Studies on Semantics in Generative Grammar*, The Hague: Mouton.

Chomsky, N. (1977) "On *wh*-movement," in Culicover, Wasow & Akmajian (eds.) (1977), 71-132.

Chomsky, N. (1980) "On Binding," *Linguistic Inquiry* 11, 1-46.

Chomsky, N. (1981) *Lectures on Government and Binding*, Dordrecht: Foris.

Chomsky, N. (1986) *Barriers*, Cambridge, Mass.: MIT Press.

Chomsky, N. (1993) "A Minimalist Program for Linguistic Theory," in Hale & Keyser (eds.) (1993).

Chomsky, N. (1995) *The Minimalist Program*, Cambridge, Mass.: MIT Press.

Chomsky, N. (1999) "Minimalist Inquiries: The Framework," in Martin, Michaels & Uriagereka (eds.)

(1999).

Chomsky, N. & H. Lasnik (1977) "Filters and Control," *Linguistic Inquiry* 8, 425-504.

Culicover, P., T. Wasow & A. Akmajian (eds.) (1977) *Formal Syntax*, New York: Academic Press.

Fukui, N. (1986) *A Theory of Category Projection and Its Applications*, Doctoral dissertation, MIT.

Gazder, G., E. Klein, G. Pullum & I. Sag (1985) *Generalized Phrase Structure Grammar*, Oxford: Basil Blackwell.

Hale, K. & S. J. Keyser (eds.) (1993) *The View from Building 20*, Cambridge, Mass.: MIT Press.

Kitagawa, Y. (1986) *Subjects in Japanese and English*, Doctoral dissertation, Univ. of Massachusetts.

Koopman, H. & D. Sportiche (1988) "Subjects," ms., UCLA.

Kuroda, S.-Y. (1988) "Whether We Agree or Not," in Poser (ed.) (1988).

Lasnik, H. & M. Saito (1984) "On the Nature of Proper Government," *Linguistic Inquiry* 15, 235-89.

Manzini, M. R. & A. Roussou (2000) "A Minimalist Theory of A-Movement and Control," *Lingua* 110, 409-47.

Martin, R., D. Michaels, J. Uriagereka (eds.) (1999) *Step by Step: Essays on Minimalism in Honor of Howard Lasnik*, Cambridge, Mass.: MIT Press.

May, R. (1977) *The Grammar of Quantification*, Doctoral dissertation, MIT.

Poser, W. (ed.) (1988) *Papers on the Second International Workshop on Japanese Syntax*, Stanford, CA: Center for the Study of Language and Information.

Sportiche, D. (1988) "A Theory of Floating Quantifiers and Its Corollaries for Constituent Structure," *Linguistic Inquiry* 19, 425-49.

鈴木右文 (1999a)「主題役割繰り上げ」『言語科学』（九州大学言語文化部言語研究会）第34号、21-33.

鈴木右文 (1999b)「弱い島からの項と非項の取出しの差について」日本英文学会第72回大会研究発表、於松山大学.

外池滋生・大石正幸 (1992)「最新チョムスキー理論の概要 — 経済性の諸原理と合法性 (5)」『英語青年』第138巻、341-43.

Ura, H. (1996) *Multiple Feature-Checking: A Theory of Grammatical Function Splitting*, Doctoral dissertation, MIT.

yubun@rc.kyushu-u.ac.jp